

宮城県における宿泊市場に関する考察

- 季節変動を中心に -

嶋倉 由宇（国際開発学分野）

【目的】

日本には四季がありこの季節性が観光産業、特に宿泊市場に与える影響は大きく、宿泊者数を増減させ、その結果、繁盛期と閑散期を生み出す。繁盛期の長期化・閑散期の短期化は、宿泊施設の効率の良い経営のためには重要な課題である。また、特に宮城県では、他の都道府県と比べ宿泊者数が伸び悩んでおり、その一因として季節変動の大きさが指摘されている。よって本研究では、宮城県の宿泊市場における季節変動の特徴をまとめ、繁盛期・閑散期や宿泊者数への影響を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究は、まず観光庁「宿泊旅行統計調査」、宮城県「観光統計概要」・「観光動態調査」のデータを主に使用し、県内の宿泊市場の現状をまとめた。次に県内の季節変動に関するジニ係数を算出し、各年・各地域ごとと比較することで、県の季節変動の特徴を明らかにし、その影響について考察した。そして、以上の分析結果を踏まえ、季節変動の対策について県庁観光課にヒアリング調査を行い、今後の宮城県の宿泊市場についても検討した。

【分析結果】

今回の分析では主に以下の4点が明らかになった。①宮城県の宿泊者に関するジニ係数は、全国の値よりも高いため、季節変動が大きいと言える。②ジニ係数の経年比較では、平成20年の岩手宮城内陸地震、平成23年の東日本大震災の影響で、この2つの年は数値が跳ね上がっている。③県全体ではなく、7つの地域ごとジニ係数を比較するとそのばらつきは大きく、仙台を除く6つの地域で県のジニ係数よりも高い数値を示した。④来県する外国人宿泊客のジニ係数は、全国のそれと比べて高く、季節変動の影響をより強く受ける。また、日本人の繁盛期・閑散期とは異なる傾向も見られた。

【結論】

景気後退局面（2つの震災やリーマンショックなど）で影響をより強く受けるのは、もともと季節変動の少ない都市部ではなく季節変動の大きい地方であり、その際閑散期よりも繁盛期において宿泊者数の減少が大きいことが明らかになった。つまり、全体として繁盛期の方が景気の影響を受けやすく、季節変動が大きくなる要因になりやすい。このことに加えて、ここ10年の繁盛期・閑散期の宿泊者数の増減を県全体・地域ごとに見ると、繁盛期の宿泊者数を増やすより、閑散期の宿泊者数を増やすことの方が難しいことがわかった。単に宿泊者数を伸ばすだけなら繁盛期に力を入れることが重要と言えるが、宿泊施設の経営効率を上げるには閑散期に対する取り組みが必要である。さらには季節変動に大きく左右される、来県外国人宿泊客にも考慮した施策も今後重要になると言える。